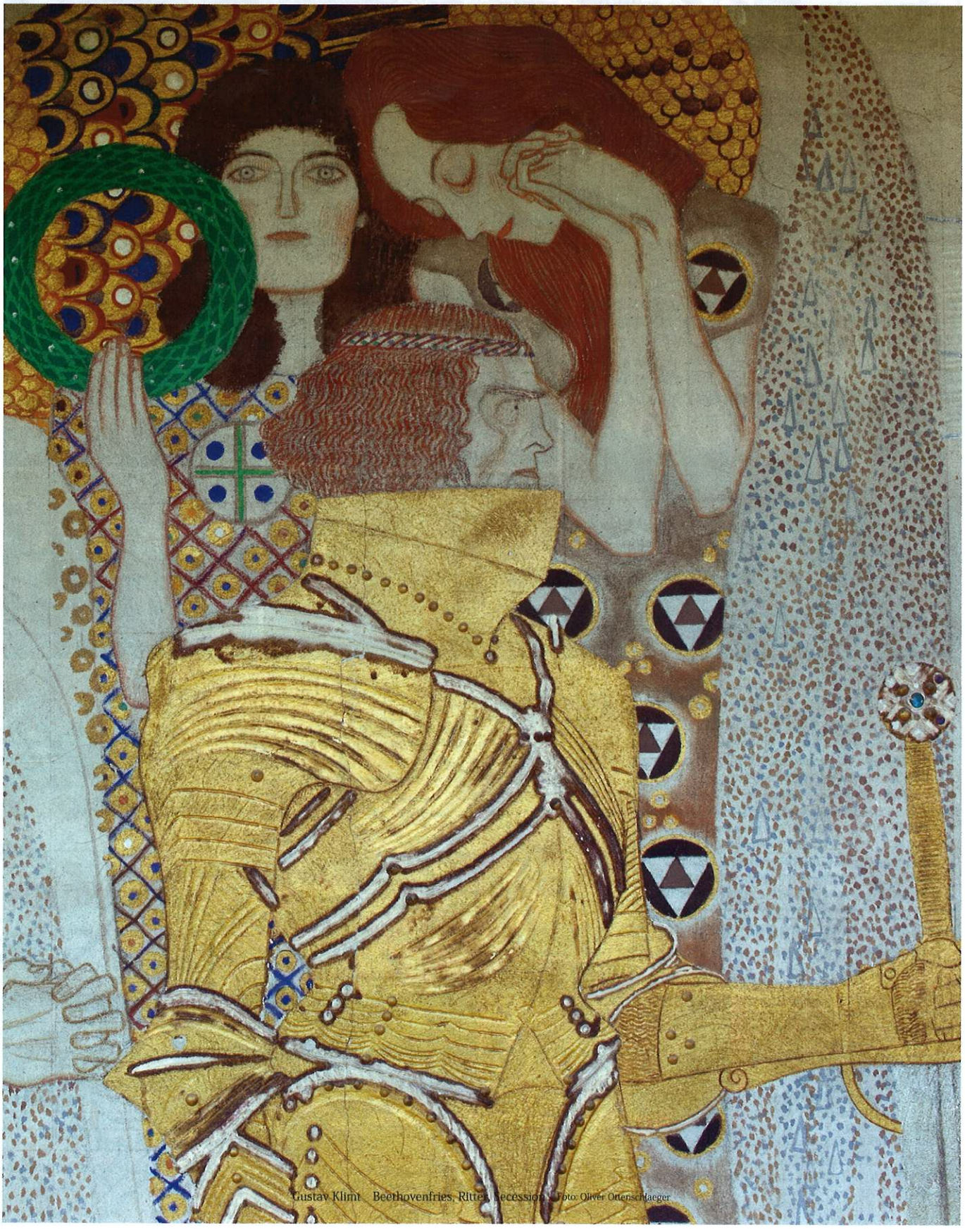
月刊ウィーン GEKKAN-WIEN 2014年2月号

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊 26 年目
創刊 1989 年 Nr. 296



Gustav Klimt Beethovenfries, Ritter, Secession Foto: Oliver Ortenschlaeger

杉本純の原子力の話 II
ウィーンと京都 29

我が国産官学の協力により、昨年十二月二三～二六日にかけて日本ベトナム原子力研究・人材育成フォーラムがハノイ他で開催された。ベトナムは既に原子力発電導入を決めたことから、ベトナム若手の研究発表の場を設けることによる知識吸収の段階から主体的な研究ができる人材の育成、研究発表を我が国とほぼ等分に実施することによる主体的意識の醸成、日本への留学選抜の一助とすることによる若手のモチベーション高揚と優秀な人材の発掘、さらに、日本の研究開発を紹介することによるベトナムと我が国の研究交流機会の促進が目的である。我が国からは、日立、東芝、三菱、国際原子力開発、原子力国際協力センター、原子力機構、東工大、長岡技科大、京大から三十三名、ベトナムからは、産業貿易省、科学技術省、原子力研究所、ハノイ工科大学、電力大学等から約八十名の参加があった。

二三～二四日のフォーラムでは、一九件の発表と学生による八件のポスター発表があった。筆者は初日のオープニング直後の「日本における安全研究の歴史と展望」と題する発表で、我が国が原子力導入以前から安全研究に着手しその後も拡充してきたこと、福島原発事故を踏まえてシビアアクシデントを中心に安全研究を見直していることなどを述べた。

発表に対し二件の質問があった他、全体的に活発な討論があり、ベトナム側の意識の高さが伺われた。翌日からの施設見学には参加出来なかったが、原子力機構主催のベトナム研修で教えた研究者が発表し再会できたこと、ベトナム出身の京大大学院留学生がポスター発表で優秀賞第二位を獲得したことなどが嬉しかった。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の陶磁器について述べてみたい。ウィーンの陶磁器と言えば、高級食器アウガルテンが有名である。一七一八年にウィーン宮廷のデュ・パキエが開きヨーロッパで二番目に長い歴史を持つウィーン窯が起源である。女帝マリア・テレジアにより皇室御用達の磁器窯となった。今では世界中で愛されているこの食器は、アウガルテン庭園の中にある工房にて全て手作業で作られている。美しい白、エレガントな形の白磁器に定評があり、代表的な絵柄にマリア・テレジア、ウィンナー・ローズ、ビーダーマイヤーなどがある。ここはその昔、皇帝一家の狩りの城館とその庭園だったが、一七七五年に一般開放され、今では市民憩いの場になっている。

一方、京都の陶磁器と言えば清水焼を代表とする京焼が有名である。京都では五世紀前半の雄略天皇の頃、現在では宇治市、伏見区に住む陶工に御器を作らせていた。その後、僧行基が詔により窯を築いたのが、清水寺への参道である五条坂界といわれている。室町時代には、明から伝えられた技法により色絵陶器が誕生し、江戸時代には、茶の湯の流行を背景に東山地域を中心に茶陶が作られ、広く京焼とよばれるようになった。明治期以降は近代的生産手法の導入とともに生産量も増大し、日本の重要な輸出品となった。アウガルテンも京焼も、時代の変遷を受けつつもクオリティや芸術性を失わず、多品種、少量生産を特色とする高品質の陶磁器としての伝統を守り続けている。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中、アウガルテン庭園で家内とともに散歩を楽しむとともに、紅茶用の食器をいくつか購入した。庭園内で開催されたコンサートを聴いたこともある。京都では清水焼の食器を買って日常的に使っている。両市の有名な陶磁器に接することができた幸運に感謝しつつ、編集部に撮影をお願いしたアウガルテン庭園の写真を掲載させていただく。

■ 杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■